

の暑い日に、持ち物は自分の身につけている物と食料品リュック一個が認められただけで、預金通帳その他の証書類は検査で没収され、ようやく無蓋車で齊々哈爾を離れた。途中、国民党軍と八路军が大河を挟んで戦闘中のところを僅かの停戦時間に渡河しなければならず、子供三人と、外に一人は出発前に死亡したので骨箱を抱いてやっと渡河した。途中何回も列車が停車を繰り返して、その度に募金して列車を運行しながら新京に着き、一週間ぐら収容所生活の後、奉天でも収容所生活を繰り返して、十月中旬内地に向けての出発地胡呂島港に到着した。

ここでも度重なる検査が行われ内地帰還の手続きを済ませ、八月下旬、米国の上陸用舟艇LST一八〇屯に乗り組み、二十二日ごろかと思われるが胡呂島を出港した。岸壁を離れ港外に出た瞬間、昭和九年四月以来約十三年間苦勞して蓄積した全財産を失ったが、新しく故国での再出発を期し、苦しくそして厳しかった大陸での想い出を胸に、荒れ狂う玄海灘の波濤を乗り越えて進むLSTの艇内で、明日から始まる故国での生活に思いを巡らせていると、夢にまで見た懐かしい日本の山々が見えて

きた。上陸地佐世保港に入港し、検疫も済ませて上陸の第一歩を印した。そして、引き揚げ手続きを完了した後北陸經由の満員の引き揚げ列車に乗り組み、十月二十五日の早朝、羽前小松駅頭に降り立った。昨日金沢から電報を打ったがだれもいなかった。駅前の食堂で食事を済ませ、佐世保で支給された物資と満洲から持ち帰った物資を持ち、徒歩で生家に落ち着いた。

嗚呼満州

兵庫県 藤岡重司

——満州の終戦日一か月前より

引揚げまでの四四一日間の記録——

昭和二十年六月二十三日午後、関東軍司令部の兵事部（連隊区）に長谷川潔曹長を訪れた。

「よい悪いは別として、この大戦争の時代に生を受けた者として、兵隊の味を知らぬとあっては、歴史を語ることができない」「だから私も召集してくれ」と頼んだ。

「判った。七月三十一日が最後予定の召集日があるから、これでよいか」

身辺整理に一月以上もあれば大丈夫と判断して、

「よかろう」と一声で、私の召集日は簡単に決定した。

先ず、妻だけに明かしておくため、自宅ヘターチョウ（馬車）で、宝山百貨店ダイヤ街祝町と、最短コースで直行帰宅する。「ただいま」「おかえりなさい」といつもと変わらぬ態度で妻は迎えた。

「いま、兵事部の長谷川さんとの話し合いで、七月二十日召集が決定したから、準備と心整理をしておくよう」と一挙に説明し、更に「君も知っている通り、身障者まで召集され、僕が召集にならぬことを不思議がっている人が多い」「在郷軍人会役員仲間を始め、満人鮮人に至るまで、噂と陰口をいわれている」「藤岡には何かある、何んだらう」と噂が大きくなり「君の耳まで入っているだろう」「僕も軍隊とは何かの本当を知り、敗戦でも僕の今後に生かしたい」「判ってくれるか」駄目押しをすると、このことを見抜いていた如く「あなたの性格から、また、あなたの今後の勉強に役立つなら、私は留守を守

ります」ときっぱりいい切った。

しかし、気丈なようでも流石女だ、とよ子の眼に光るものがあつた。

この頃の召集令状は、在郷軍人会役員を通じ、交付されるシステムになっていた。今まで何回となく、友人や知人宅に、私が配布した経験では、家族の顔をまともに見ることができないほど、小心な気持ちになりがちの私であつたが、自分と妻の場合は、平常と変わらない、むしろ坦々とした気持ちでおられた。召集は男にとっては、生死の境と言われていた。また、夫を持つ主婦にも、夫の召集は、夫の死に直結する重大問題である。しかし、意外に二人は冷静に対話ができた。あの時点で、日本人の男なら、誰でも心の中では、今日くるか、明日か。恐怖と締めめの二つが、交差していない者も誰もいなかった。それほど、毎日といつていいほど、知人、友人が召集になつていたのである。それだけ戦争は緊迫していた。私はある事情で、召集はないことになつていた。

そのため、兵事部に、私を召集するよう、私自身が申し入れた。隣組の男で残っている者は、四十五歳以上、

または、身障者だけしかいなかった。召集令状が来るのが当り前で、来ないのが不思議という当時、満州の日本人間の常識となっていた。これが原因か、二人は冷静に對話ができた。

国家、民族の非常事態に対する緊迫思想が、徹底充満していた時代であった。それだけ、このムードに国民の誰もが酔って、誰もが冷静のようで冷静さを失い召集、戦場、人が殺されることを、あたかも当然化され、また誰も国民の義務とさえ信じ、これが無鉄砲といわれる戦争を起し、悲惨な敗戦となった。こうしたムードが人間の心を、本人が知らぬうちに、知らず知らず麻痺し、取り返しのつかぬことになったことを日本の戦争、敗戦がよく教えてくれている。

弓岡ビル居住の西生利雄さんが、ソ連兵に追われて逃げ帰った。そのため秘密の入口が判り、地下室まで追いつけ込んだ。このためウイスキーを出して酔っぱらわせ、私が追い払おうとした。奴さん「マダムマダム」と女を要求するので、三笠町まで連れ出し、搬いてしまった。私の妻がこの時二十五歳だった。私の住んでいる弓岡ビ

ルでは、同じ年頃の若妻、娘さんが居住している。昨夜の事件で、ソ連兵が襲撃してくれば女は隣りの日本橋ビルに、屋上から屋上に梯子を掛けて避難手配した。それが間に合わぬ場合は「ソ連兵が銃口を向けたとき、私が出刃包丁でお前を刺殺し私も死ぬ」「日本人の凄まじい気魄を見せてやる」「このため日本人は怖い観念を彼らに注入すれば、もう日本人を強姦しなくなるだろう」「逃げ廻るから彼らの獣欲を煽ることになる」「敗戦で一度死んだ私達だ。生きて恥をかくより、死んで抗議しよう」「お前は決心できるか」「死ぬなら夫婦共に死のう」と妻にいった。

「私も本望です」「ソ連兵の屈辱を受けるより死を選ぶ」「あなたといっしょに死ぬなら悔いなし」と妻は言い切った。しかし、顔は既に死神がついたようになり、真青になっていた。さっそく出刃包丁を研ぎにかかり、「こうして一つきしたあと」「私は武士の作法通り切腹」すると実演して、深夜一睡もせず待った。幸か不幸か、ソ連兵はこの晩も翌晩も来ずじまい。それから無事にすくすくすることができた。

夢の日本上陸、佐世保港沖

平素は閣下夫人といわれ「そうでございます」の貴婦人スタイルも「盗み」「人売り」「儲けるため手段を選ばぬ」「素朴さから怒り」「悪言雑言」等、人間の本性、個性むき出しの汚い、悲しい話題を満載した大瑞丸も、母国佐世保港沖に投錨した。検疫官の検疫の結果、疑似コレラ患者が若干名いるため、約一週間以上上陸できず、停船させられた。夢にも見ていた日本の港を目の前にして、上陸できぬ心の動揺から、焦りと不安、不満爆発で、多数の者が自己本位となって、「コレラ患者は残して我々を上陸させよ」「患者といっしょにするのは不合理だ」「団幹部は我々の要求を当局と交渉せよ」と大騒ぎとなった。

いよいよ上陸、この土は日本の土だ

上陸命令は一週間後にあり。全員我々を運んでくれた大瑞丸タラップから、佐世保海岸壁に上陸した。

「この土は日本の土だ」「皆日本の土を踏んだぞ」と誰かが叫ぶと、子供のようにいっせいに「日本の土だ」「日本へ帰った」と飛び上がる者もいた。検疫所と税関

の検査に米軍MPが目を光らせていた。頭からメリケン粉のようなDDTの消毒、荷物検査にも同じ、荷物に珍らしい者はMPが失敬したが、日本に帰って来た嬉しさか、文句を言う者はいなかった。

収容所入り

胡蘆島港の収容所と違い、すべてが満点。それに帰国できたという絶対の安心感から、悪くてもよいように映るのが人情。比較して悪い面は何もない。収容所長が「ご苦労さんでした」「もう大丈夫です」「皆さんが定着地に行かれるまで、心から寛ぎ下さい」と挨拶のあと「皆さんの無事帰国を祝福して、酒一人一本、赤飯を特配する」という言葉が終らぬ内に誰かが「萬歳萬歳」と叫ぶと全員がつかれて「萬歳」の声となった。

満州引揚者の体験より

長崎県 田島 梧郎

私は昭和八年八月、満州鏡泊学園学生（二百余人）と